

学 位 論 文 題 名

北村透谷と明治20年代

学位論文内容の要旨

〔形式〕本論文は、はじめに、第Ⅰ章（1～5）、第Ⅱ章（1～6）、第Ⅲ章（1～5）、おわりに、注によって構成され、400字詰め原稿用紙に換算すると、その総計は、約448枚に相当する。

〔内容〕本論文が主な対象とする北村透谷は、戦後の近代自我史観と民衆史観に後押しされた近代文学研究と批評において、多くの場合、恋愛を機軸として近代自我をいち早く獲得した詩人・批評家であるか、或いは民衆に根ざして国民概念を提唱した草分け的な思想家として特権化されてきた。しかし、そうした特権的な北村透谷像を疑うところから出発する本論文は、特に透谷の批評が、明治20年代の様々な言説とどのような関係をもっていたかを問い直すことで、この神話化された透谷像の再検討をめざしている。特に、透谷と交流のあった巖本善治、星野天知などの「女学雑誌」系の言論人や、徳富蘇峰、山路愛山などの民友社系の言論人のみならず、当時、『日本文学史』や『国文学読本』などを刊行した帝国大学系の学者との文学観や思想上の関係にまで広く目配りをしている点に、この論文のひとつの特徴があるといえる。また、これらの諸関係を明らかにする上で、近世文学の明治20年代における再評価といった、従来、あまり顧みられることのなかった局面に着目している。しかもその背景として、木版から活版への出版形態の変動に伴う近世文学の翻刻ブームを検討しただけでなく、それに即応する近代最初の文学史の刊行や、それらの出版物を論評する批評の誕生の問題にまで目を配っている。つまり、透谷を中心とした、明治20年代の文学観および思想の変容を、出版形態、出版動向との密接な関係において捉え直した点も、本論文の大きな特色と考えることができる。

「はじめに」では、戦後の日本近代文学研究で隆盛をきわめた近代自我史観や民衆史観において、恋愛の観念を中心とした近代自我の先駆的な獲得者であるか、或いは民衆の声に根ざした国民像の提唱者の先駆けとして特権化されてきた北村透谷像への疑念を示している。その上で、そうした事後的な評価に対して、明治20年代の言説空間の諸関係の中で透谷をあらためて捉え直す必要性を説いている。

第Ⅰ章は、「江戸戯作」、「元禄文学」、「町人文学」といった諸範疇が交錯する場としての「徳川時代の軟文学」に関する透谷の評価のありようと、同時代の諸言説との関係を検討した箇所である。

まずⅠ章1で、「徳川時代の軟文学」に関する定義が行われたのち、続くⅠ章2で、木版から活版への出版形態の変化にともなう近世文学の翻刻ブームの中で、当時の文学が極衰

期にあるか否かといった文学極衰論争が戦わされ、そこで明治文学の意義が、特に「元禄文学」に関する評価に関連づけられていく様相を分析している。また、そうした状況の中で批評活動を展開する透谷が、「元禄文学」のみならず、「徳川時代の軟文学」一般に対して、肯定と否定の背反する評価を下している点を強調している。

Ⅰ章3は、透谷の否定的な態度が、どのような価値観と時代状況から生み出されたかを検討した部分である。ここでは「軟文学」の好色性が、精神的な恋愛を文明的とする透谷の進歩史観、文明史観に照らして否定的に評価される経緯を確認するとともに、それが巖本善治や坪内逍遙などの同時代の恋愛観や「軟文学」評価と共通するものであることを明らかにしている。また、それとは別系列の評価として、『日本古典全書』などの、古典文学の全集化に着手し始める帝国大学系の学者たちが、あるべき国民の性情に背馳するものとして、「軟文学」を否定し、『古典全書』などから排除している様相を究明している。つまり理由の相違はあれ、透谷の否定的な態度は、同時代において特殊でも特権的なものでもなく、当時の文芸思潮の一翼を担うものであった点を明らかにした部分といえる。

他方、Ⅰ章4は、透谷が肯定的な態度を示す理由と、時代状況との関係を辿り直した箇所である。特にここでは、透谷が明治期になってはじめて明確化した「平民」という身分を「徳川時代」に投影し、「平民の初声」が聞かれる文芸として「軟文学」を肯定してゆく経緯を明らかにしている。それに加えて、このような透谷の評価が、透谷と関わりの深かった徳富蘇峰、山路愛山などの民友社系の言論人と共通する評価軸であることをも、本論文は見逃していない。また、三上参次、高津鉄三郎の『日本文学史』など、帝大系の学者による文学史的な記述の中にも、「軟文学」に「人情」の表出を認めるものがあり、それが「平民の初声」と微妙に重なり合う評価軸であることも論証している。

Ⅰ章5では、透谷のみならず、民友社系の言論人や帝大系の学者たちが、それぞれ別の価値観や理由からではあるが、いずれも「徳川時代の軟文学」に対する背反する評価を下しており、その点で背反する評価が明治20年代の言説空間において、一定の広がりをもっていたことを明確に示している。

第Ⅱ章は、「徳川時代の軟文学」の中でも特に「元禄文学」の再来と見なされる尾崎紅葉と幸田露伴の評価をめぐる、透谷と明治20年代の諸言説との関係を論じた章といえる。

まずⅡ章1で、この章のこうした基本的な目的が呈示されたのち、続くⅡ章2では、明治20年代における「元禄文学」の流行を背景とする透谷の「軟文学」観が、徳富蘇峰、山路愛山、星野天知など、民友社系および「女学雑誌」系の言論人との対比において、より詳細に検討される。とくにここでは、蘇峰と愛山とが、明治20年代前半の改良ブームの中で、「軟文学」を改良の対象と見なし、その改良の上に立つ明治文学を提唱しており、中でも蘇峰が、いまだ改良をなしえていない紅葉や露伴の作品を、「作者の罪」に帰していることに着目している。その上で、透谷が「徳川時代の軟文学」に虚無思想を見出すのみならず、そうした思想の原因を封建制といった「時代の罪」に帰し、明治文学の担い手たる、紅葉、露伴の「作者の罪」と区別していた点を究明している。この点で本論文は、改良という基準からのみ「軟文学」と近代の文学とを裁断する同時代人に対し、透谷がそれぞれの時代状況を相対主義的にみる視座を獲得していたことを明らかにしているといえる。

一方、Ⅱ章3では、更に透谷の批評を詳細に検討して、「軟文学」の中でも特に「元禄文学」の好色性を、虚無思想とともに「時代の罪」に帰す透谷の批評を浮き彫りにする。また、その上で、「粹」という概念を持ち出して、こうした好色性が明治期の紅葉、露伴に継承されるといった見解をとる透谷が、しかし、前者をあくまで「時代の罪」とし、後者にのみ「作者の罪」を認めていた点を確認している。

Ⅱ章4は、透谷にとっての文学のあるべき姿、つまり「文学の本色」が、同時代における批評の形成と密接に関連していた経緯を明らかにしたものである。つまり、明治20年代初頭の批評の形成において、急増した出版物を論評することが、社会の進歩をもたらすといったイデオロギーが生み出され、それが透谷にも内面化されていった経緯が示される。

その上で、Ⅱ章5～6では、単に「元禄文学」を模倣するだけの、進歩を欠いた文学であるといった理由から、紅葉、露伴の作品が批判されてゆく様相を分析している。これも、同時代の言説空間において広く共有される批判であることが明らかにされるが、しかしそれとともに、Ⅱ章2で究明した、透谷の相对主義的な視座との関係にも本論文は注意をはらっている。事実、ここでは「平民の初声」を認める「元禄文学」に対して、その好色性といった負の側面を「時代の罪」に帰すといった相对主義的認識を示す一方で、明治期の文学については進歩を要請し、それを欠くが故に紅葉、露伴の「作家の罪」が問題化されるという透谷の分裂した姿勢を、この章の結論として呈示している。

第Ⅲ章は、透谷が「徳川時代の軟文学」に対して下した背反する評価のうちの、「平民の初声」に関する分析を行った章であり、ここでも同時代の他の「平民」に関する議論、特に徳富蘇峰のそれとの関係が問われている。

このうち、Ⅲ章1で、まず「平民」という表象の「濫用」をめぐる問題を、特に蘇峰と透谷の関係を中心に問うといったこの章の基本方針を呈示し、次いでⅢ章2では、徳富蘇峰の平民に関する議論を分析して、そこに西洋社会を過度に理想化し、その理想化において日本の遅れが問題として浮上するといった、OccidentalismとOrientalismとが複層的にからみ合った概念形成があったことを示している。

続くⅢ章3は、蘇峰の平民に関する議論のその後の展開を追究した部分であり、ここではまず、日本の遅れを自他に対して隠すために、理想化された西洋の平民概念を、当時の日本社会にも見出そうとした蘇峰の姿を浮き彫りにする。そして、そうした強引な西洋世界との「照応」の帰結として、再度、日本における平民の不在に直面するといった、蘇峰の議論の更なる展開を明らかにする。

Ⅲ章4～5は、ここまでの蘇峰の平民に関する議論との比較において、透谷における平民像を詳細に検討した部分である。ここではまず最初に、言論に限定された自由民権運動の新たな展開をめざし、「徳川時代」に「平民の初声」を認めるのみならず、明治維新をも平民による革命と遡及的に解釈する透谷の姿勢が照らし出される。また、そこに、主に「中等階級」による穏健な改革をめざす主体としての、蘇峰の平民像との相違が示されている。そして、その上で、透谷の平民もまた、理想化された西洋世界の平民を反射させたものであり、その点では、蘇峰の平民と同様に日本に不在の平民であることを明らかにする。つまり、その内実を異にするとはいえ、それぞれの思想に応じて理想化された西洋世

界の平民を日本社会に投影し、実際には存在しない平民像を「濫用」した点において、両者が相同的であることを示しているといえる。

「おわりに」では、Ⅰ～Ⅲ章の分析の結論として、少なくともその批評に関する限り、透谷の独自性や先駆性は、かなり限定された範囲にとどまり、むしろ明治20年代の言説空間がとりあげた問題の多くを共有しつつ、その批評活動を展開していたことを明らかにしている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 中 山 昭 彦

副 査 助教授 押 野 武 志

副 査 助教授 権 錫 永

学 位 論 文 題 名

北村透谷と明治20年代

本委員会は、上記の論文を審査するに際して、基礎的な手続きの面と内容面とに分け、本論文が新しい研究の方向を拓くものと評価できるか否かを検討した。基礎的な手続きとして検討したのは、明治20年代の言説空間において、北村透谷と、民友社系および「女学雑誌」系の言論人、それに帝大系の文学史の書き手などとの言説の関係を明らかにし、また当時の出版動向を近世文学ブームとの関連において検討する上での、必要とされる文献資料の適否、当該分野の研究史の把握の度合いと参考文献の理解度、引用文献の正確さ等の点である。また内容面としては、全体の構成と論理の展開力、各章ごとのテーマとその展開、方法の有効性、学術研究としての達成度などについてである。以下、それらの検討の結果と本委員会の評価を、要点をしぼって説明していくことにしたい。

まず基礎的な手続きに関してであるが、本論文は、北村透谷を中心としつつも、明治20年代の言説空間と出版動向を幅広く考察する研究であるため、その個々の領域について、本論文が十分な量の文献を収集し、適切な理解を示しているかが検討された。その結果、本委員会では、明治20年代に対象を限定したことから、その前後の時代の文献に対する目配りが不足してはいるものの、北村透谷の評論に関わる20年代の言説に関しては適正な分量に達しており、各文献の解釈についても、ほぼ妥当なものであるとの判断に達した。

また、本論文は、主に北村透谷の評論と、近世文学および平民の表象に関する明治20年代の諸言説、それに当時の出版動向に関わる研究であるため、上記の各領域における既存の研究に対する正確な把握と、それに対する妥当な評価と批判がなされているか否かが問題となる。本委員会では、この点に関しても、各領域に関する研究動向の把握は公正なものであり、その評価と批判にも、十分な説得力があるものと判断した。

更に、参考文献の理解度と引用文献の正確さについてであるが、前者に関しては、歴史学と文学の双方にまたがる新しい概念である「表象」の理解にやや不十分な点がみられるとはいえ、その他の点では十分な理解が示されており、後者に関しても、用字などにやや

不正確な点がみられるものの、その度合いは許容範囲内にとどまるものであると考える。

次に内容面についてであるが、まず学術的な達成度という点からみれば、本論文の第一の成果は、明治20年代の言説空間との諸関係において、透谷の思想と文学観を再検討し、特に近世文学に対して示された文学観と思想という点において、従来の特権的な先駆者としての透谷像を相対化した点にあるといえる。透谷は、近世文学に対して、肯定と否定の背反する評価を示し、そのうち肯定的な評価は、近代になって制度化された平民という身分を近世に遡及的に適応し、そこに民衆思想の萌芽をみることから生じているが、本論文はそうした経緯を丹念な分析によって明らかにした上で、それが同時代に幅広く存在した民衆観・文学観であったことを論証している。また、近世文学を猥雑と見なすことからくる否定的評価も、やはり広く共有されており、しかも肯定と否定の背反する評価が、同じ論者によってなされていることさえ少くない点をも、本論文は明らかにしている。つまり、こうした論証によって、明治20年代において、かなり凡庸な批評家であった透谷の一面が、的確に示されているといえる。

それに加えて、本論文の第二の成果として挙げられるのは、この凡庸な透谷像が、その単なる一側面ではなく、少なくとも戦後における透谷の特権化の根幹に関わるものであることを示している点である。現に、近世文学の肯定的な評価が、民衆の発見者・透谷という戦後的評価に、そして否定的な評価が、近世文学の猥雑さの克服を提唱する、近代的な自我の先駆的獲得者としての透谷という、もうひとつの戦後的評価に結びついている。その意味で、この二点において透谷の同時代的凡庸さを論証することは、戦後から現在にいたる透谷評価に、大きな変更を迫るものといえる。

また、この論文は、単に透谷の凡庸さを示すのみならず、同じ時代に類似する文学観や民衆観がみられた要因をもさし示しているが、これが第三の成果といえるものである。前者の文学観に関していえば、出版形態の変化に伴う近世文学の翻刻ブームや、それと即応して出現する尾崎紅葉・幸田露伴などの元禄文学を模倣した文学の流行を、いかに位置づけるかという点から生じたことを究明している。更に後者の民衆観に関しても、西洋世界の民主主義や革命の担い手としての民衆を、過度に理想化するところから、それがもたらされたことを明らかにしている。そうした論証において本論文は、出版資本の動向や、近代初期における西洋像との関わりといった点にまで、踏み込んでいるといえる。

もともと本論文には、透谷の凡庸さを論証しようとするあまり、近世文学に更に微妙な評価を下す坪内逍遙の分析がかなり強引なものになるといった問題点もないではない。現在からの分析視点と明治20年代の状況に根ざすそれとの、境界線がやや不分明な箇所がみられるところも、論証を性急なものにしている欠点といえる。

しかし、上の三点において、北村透谷を明治20年代の言説空間との諸関係において捉え直す試みは、十分に成功しており、透谷研究と明治20年代の言論の展開に一定の新生面を開いた研究として評価できる。

本委員会では、以上の審査結果に鑑み、全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しい成果であるとの結論に達した。